

宮城県 丸森町



1. 不動尊公園内の清流。夏はキャンプ、秋は羊煮会やバーベキューのお客さんと賑わいます。 2. 四季折々の阿武隈川の風景を屋形船から楽しめる舟下り。 3. 「日本棚田百選」に認定された丸森町の沢尻棚田。

Pick Up

人と自然が都市住民を魅了する 移住者が増え続ける「新しい交流のカタチ」

宮城県伊具郡丸森町は、農業を基幹産業とする中山間地域のまち。急激な人口の減少と高齢化による町の衰退に対処するため、「丸森型グリーン・ツーリズム」を進めています。今回は、観光交流やグリーン・ツーリズムを、移住にまで結びつけている丸森町の取り組みをご紹介します。

History
1

丸森町の概要 「グリーン・ツーリズムの胎動」

なんにもないけど なんでもある丸森

丸森町は宮城県の南端に位置し、県内町村では二番目に広い約二百七十三平方キロメートルの総面積に、約二万六千人が暮らしています。町の北部を東北第二の大河である阿武隈川が貫流しており、川と支流の流域一帯は平坦地ですが、阿武隈山地の山々に囲まれて町域の約七十パーセントを山林が占める中山間地域です。江戸時代には仙台藩伊達家の所領となつて、阿武隈川舟運の拠点として栄えた歴史があり、町内には当時を偲ぶ歴史的資産も数多く残っています。基幹産業は農業で、水稲・畜産・野菜を主要作物として、林産物などを組み合わせた複合経営が行われています。隣接の福島県相馬郡新地町には、相馬共同火力発電株式会社の新地発電所（二百五十キロワット）があり、東北電力及び東京電力へ電気を供給しています。全国的に知られるような名所や特産品はありませんが、素朴ながら美しい自然、歴史の香り、豊かな食材、そして穏やかで温かい人々・・・日本人の魂に共鳴する多彩な魅力を丸森町は備えています。

動き出した観光客誘致

「町の基幹産業は農業ですが、山間の丘陵地帯が多い土地柄から小規模な農家が多く、経済的な理由などで若い人の農業離れが進みました。過疎化と高齢化が町の大きな課題です」と話すのは、町長の渡辺政巳さん。渡辺さんは丸森町の出身で、平成十一年に町長に就任して三期十年目を迎えています。町では以前から産業の振興策と

お問い合わせ先：丸森町役場・産業観光課 TEL 0224-72-3017

各地区特色ある文化や取り組みがある **丸森町・8つの地域**

丸森型グリーン・ツーリズムとは…
阿武隈ライン舟下り、不動尊公園キャンプ場、滞在型市民農園（クラインガルテン）に代表される「自然休養型観光」、齋理屋敷を中心とした「歴史、文化体験型観光」、そこで提供される自然や農の「学習・体験型観光」、直売所、農家・林家レストラン、そば打ちなど町民との「ふれあい交流」「おもてなし」の総称。

- 丸森地区
蔵の郷土館 齋理屋敷
阿武隈ライン舟下り
不動尊公園キャンプ場
国民宿舎あぶくま荘
不動尊クラインガルテン
- 大張地区
大張沢尻棚田
大張物産センターなんでもや
- 小斎地区
農業体験館 里の家
- 大内地区
自然薯収穫体験
佐野ひまわりまつり
- 館矢間地区
館矢間ひまわりまつり
- 金山地区
金山城跡
金山新堤（みやぎ蔵王三十六景）
- 耕野地区
あぶくまの里 たけのご狩り
ころ柿作り体験ツアー
芦沢がったり村
- 筆甫地区
筆甫クラインガルテン
ひっぽUIターンネット
ひっぽ筆まつり
筆甫そば打ち体験館



丸森町長 渡辺 政巳さん

して観光と交流による町おこしに着目していました。しかしそれまで観光といえば阿武隈川の舟下りと、国民宿舎「あぶくま荘」の二点セットのみ。その状況を変える大きなターニングポイントとなったのが、昭和六十三年の阿武隈急行の全線開通（福島駅〜榎木駅）だったといえます。

「榎木駅からはJR線で仙台駅につながっているのですが、福島と仙台が結ばれました。丸森駅は沿線の中で観光ポイントとして地域内外から期待されたのです。この年は他にも、町内の阿武隈溪谷が県立自然公園に指定されたり、江戸時代から続いた町の豪商・齋藤家の屋敷を『蔵の郷土館齋理屋敷』として一般公開したり、さらに『産業伝承館』も設置



丸森町役場・産業観光課 課長 木村 和紀さん

域づくりを見守り続けてきた丸森町役場・産業観光課の木村和紀課長は語ります。

「私は以前に農林課や商工観光課におりましたが、平成元年に耕野地区でスタートした『たけのご狩り』の体験ツアーが、住民による交流事業のさきがけだと思っています」

さらに行政が平成五年に不動尊公園キャンプ場を拡張するなど、観光客誘致への取り組みが動き出したのです。

し、観光地・丸森づくりへの意識は高まったと思えます」と渡辺町長。

以降、町内では、いくつかの活動が少しずつ形を見せ始めます。町の地域づくりを

町をまるごと盛り込んだ「まるもり水とみどりの百貨店」

平成十八年、町は更なるステップアップを目指し、「丸森型グリーン・ツーリズム」を効率的にコーディネートして

History 3
外部の視点で丸森まるごと売出し中
「よそ者」が作った新しい器

行事を企画する。こういったことで地元へ馴染み易くなるのか、クラインガルテンの入居者のうち、これまで四人の方が町内へ移住してきました。地元の方の尽力には本当に感謝しています」

また、平成十五年に開店した大張地区の「なんでもや」がユニークな住民活動として全国の注目を集めました。たつたひとつ残った地域の商店が、経営困難で閉鎖。日用品が買えなくなり困った地域住民が、「自分たちの手で店を復活させよう」と立ち上がったのです。一口二千万の出資の呼びかけに同地区の三分の二に当たる約二百世帯が応じ、行政の支

援は受けずに開店資金を住民で調達。みんながつくった小さなスーパーをみんなが利用し、開店一年目の売り上げは、目標の三倍を超える約三千五百万円。二年目以降も順調に伸びています。沖繩・やんばるで百年前に誕生した村民全員出資で運営する「共同店」がモデルとなっており、寄り合い所として地域の人をつなぐ拠点にもなっています。

「なんでもや」や直売所に出荷するため、高齢者が野菜の作付けを再開したり、定年退職後のサラリーマンが農業を開始するなど、地域内での新陳代謝が進んでいます。



直売所では採れたての野菜や加工品が揃う



地域住民が共同で運営している「なんでもや」



不動尊クラインガルテン

や浴室も備えた休憩小屋と、そこに隣合わせの農園をセットにして貸し出す『滞在型』市民農園です。平成九年度より事業を開始、五億五千万

の班長を務めているのが大内一郎さんです。以前に企画課で「不動尊クラインガルテン」の立ち上げに関わりました。

「クラインガルテンは台所や浴室も備えた休憩小屋と、そこに隣合わせの農園をセットにして貸し出す『滞在型』市民農園です。平成九年度より事業を開始、五億五千万



丸森町役場・産業観光課 農家交流班 班長 大内 一郎さん

「平成十七年には筆甫でも八区画のクラインガルテンをオープンしました。両クラインガルテンともおかげさまで満杯状態が続いています。利用者も口コミでアピールしてくれて、いわば、交流のアンテナの役割を果たしています。仙台からの利用者がい

円をかけて整備しました。これは東北地方では初めての試みで、マスコミに大きく取り上げられて話題になり、申し込みも十八区画に対し四十件を超え、当時の反響はかなり大きかったと思います」と話します。

不動尊クラインガルテンは一年単位の契約で、契約更新により三年間継続使用が可能。使用料は年額三十六万円（光熱費は別途）で、月間二泊以上または四日以上来て農園の手入れが可能であることなどが利用条件です。

「また、クラインガルテンの運営は、地元農家で構成する市民農園管理組合にお願いしています。常駐の管理人が、畑作りを指導したり、入居者と世間話をしたりする。また、季節ごとに入居者との交流

ちばん多いのですが、首都圏からも来ていますよ」

地域を元気にする住民力

「クラインガルテンは行政のしかけですが、住民の皆さんの力で成功しているもののがうがたくさんあります。農家が、収穫した野菜などを持ち寄って売る直売所がその良い例。今では各地区合わせて十数カ所の直売所があり活発に営業しています」と大内さん。

History 2
丸森型グリーン・ツーリズムへ行政のしかけと住民力

平成八年、町は「第三次丸森町長期総合計画（平成八年〜平成十七年）」を策定。その中で町は農業自体を観光資源ととらえ、農家民泊や農業体験、山村留学などを本格的に考えるようになったのです。そして、平成十二年に開設した「不動尊クラインガルテン」がグリーン・ツーリズムへの大きな転機をもたらします。

産業観光課で、農村交流班の班長を務めているのが大内一郎さんです。以前に企画課で「不動尊クラインガルテン」の立ち上げに関わりました。

「クラインガルテンは台所や浴室も備えた休憩小屋と、そこに隣合わせの農園をセットにして貸し出す『滞在型』市民農園です。平成九年度より事業を開始、五億五千万



農業体験館「里の家」オーナー 北村 保さん

功している『地域資源を生かした交流人口の増加策』を学ぶというもので、丸森町の取

いて、大学を卒業後、東北でツーリズム関係の出版社に勤めていました。そこで丸森町を知り、魅力にとりつかれて移住してきたということです。議論を重ねるうちに、早川さんは「丸森町では、各個人・団体がグリーン・ツーリズムや観光客誘致に頑張っているけれど、お互いに何をしているかを知らない。情報の一元化・発信をしていくことが必要ではないか」と考えるようになります。



「まるもり水とみどりの百貨店」“てんちょう” 早川 真理さん

「この百貨店は外からの視点がないと生まれなかったとリードするよりも、地元の人

た。イギリスやフランスの農村で成り立っている『地域資源を生かした交流人口の増加策』を学ぶというもので、丸森町の取

丸森町の交流人口は年々増加しており、現在では年間五十万人に迫る勢いになっています。また移住者も延べ五十人と百人を超えています。筆甫地区の小学校では、児童数の約三割をイターン家族の児童が占めているほどです。この状況について、渡辺町長はこう語ります。

History 5 成果と今後の課題 増える続ける交流人口と移住者

人々の心を癒し続ける

丸森町の交流人口は年々増加しており、現在では年間五十万人に迫る勢いになっています。また移住者も延べ五十人と百人を超えています。筆甫地区の小学校では、児童数の約三割をイターン家族の児童が占めているほどです。この状況について、渡辺町長はこう語ります。

電気のあるさと紀行 地元の豪商だった齋藤理助氏の邸宅や蔵に、所蔵品(お宝)を展示しているのが「齋理屋敷」。齋理のダンボ(旦那)は、材料を吟味した高価な家具・調度品やハイカラなモノを気前良く購入しましたが、とても使用人思いでもあったそうです。蔵しあたるどころか、小遣いをたっぷりくれたり、もし泥棒が入った時も「品物よりも自分の体を大事にしない」と言い聞かせていたとか。丸森の人の温かさが、垣間見えるエピソードです。取材の合間、阿武隈ライン舟下りの休憩所に寄った時、何も言わないのに「よろしかったら」とコーヒーをサービスされてビックリ。受け継がれている温かな丸森人気質にふれたようで、うれしくなりました。

も、文化も歴史も、食も生活も、まるごと丸森を楽しんでもらおうという趣旨で「百貨店」と名付けました。多彩な魅力がある丸森全体を、わくわくするデパートのような空間としてとらえたのです」と早川さん。

比較的早く(平成四年)丸森町へ移り住んできた人の中に、小斎地区在住の北村保さんがいます。神奈川県に住んでいたころに大病を患い、食生活を直そうと考えたのがきっかけだったといえます。「関東近辺に思うような所がないので悩んでいたところ、宮城県に住む知人からたまたま丸森を紹介されたのです。それで来てみたら、一目で気に入りました。なだらかな山々に囲まれた風景が故郷に似ていたこともありすが、決め手は素材で温かな人と風土でした。当時小学生だった息子を連れて役場へ相談に行ったら、担当の方がやはり同じ年頃の子供さんがいるという

一体感が生まれ、さらにその情報をお互いが活動に利用できるようになったのです」

「住んでみて冬の寒さの違いには驚きましたが、冬から春に変わっていく山々の風情は最高。四季にメリハリがあつて、自然が本当に美しいのです。でも他にも自然の美しいところはたくさんあるでしょうが、なんといつても人の温かさは丸森ならではです」

「この会では自分たちの経験を活かして、I・Uターンを希望する人を応援する活動をしています。たとえばツアーを開催してメンバーの家を見学してもらったり、移住者の

History 4

丸森町に移り住んでみて 地元との交流を大切に

四季の美しさと人の温かさに魅せられて

移住農家が連携して I・Uターンを支援

町内には、北村さんのようにI・Uターンして農業を行いながら暮らしている人たちが集まって作った会があります。それが「丸森ニューファーマーズネットワーク」です。現在は二十五世帯ほどのメンバーがいて、北村さんもその一員。